

目から鱗！楽々時系列 1 基本例題①（期末ストックを有効に使おう）。

【公認会計士試験用の連結ツール】

一般に公認会計士試験や日商簿記検定の受験専門校では子会社の純資産の推移を示した時系列表が様々な名称でもって使われています。これらの表に『楽しく学ぼう！連結会計』で紹介した方法をほんの少し組み込むだけで、より迅速・確実に問題が解けるようになります。Let's try!!

【例題】『楽しく学ぼう！連結会計 3』の内容に基づいています。

P社は平成X1年12月31日にS社の発行済議決権付株式総数の80%を420,000円で取得した。

連結財務諸表作成上の留意事項

1. 平成X1年12月31日(支配獲得日)における投資と資本の相殺消去により発生したのれんは、支配獲得日の翌年度から10年間にわたり每期均等償却を行う。
2. 平成X1年12月31日～平成X3年12月31日にP社のS社株式の保有状況に変動はなかった。
3. 資料として与えられている事項以外は考慮しないこと。

平成X1年度S社個別貸借対照表

S社貸借対照表				平成X1年12月31日				(単位:円)
諸	資	産	900,000	諸	負	債	500,000	
				資	本	金	300,000	
				利	益	剰	余	
				金			100,000	
			900,000				900,000	

平成X2年度S社個別貸借対照表

S社貸借対照表				平成X2年12月31日				(単位:円)
諸	資	産	950,000	諸	負	債	500,000	
				資	本	金	300,000	
				利	益	剰	余	
				金			150,000	
			950,000				950,000	

平成X3年度S社個別貸借対照表

S社貸借対照表				平成X3年12月31日				(単位:円)
諸	資	産	1,000,000	諸	負	債	500,000	
				資	本	金	300,000	
				利	益	剰	余	
				金			200,000	
			1,000,000				1,000,000	

※ 今回の例題は、その趣旨（時系列表の確認）からP社財務諸表と解答欄を省いています。

※ 以下、連結第2年度の処理を中心に確認します。以後、全ての例題についても同様です。

【時系列表（ストック・アプローチ）】（単位：円）

この表は流れ作業で問題が解けるように枝分かれ図の内容を追加しただけのものです。

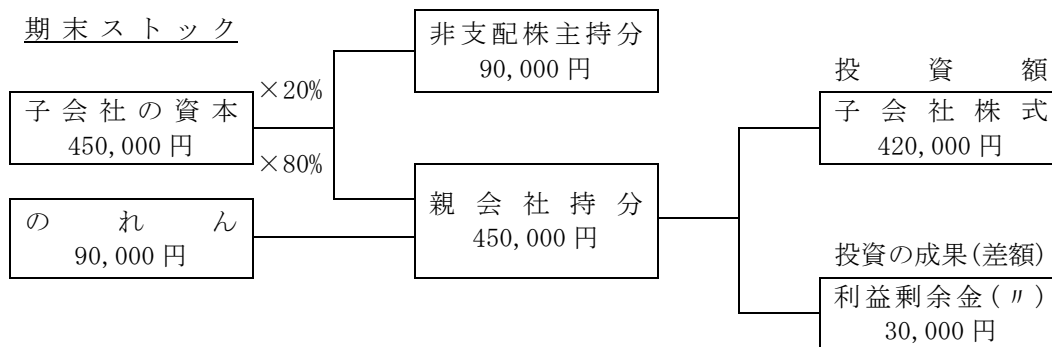
この方法の特長は、以下3点です。

- ① のれんの処理を除き、当該年度の処理だけで全てが完結する。
- ② 親会社に帰属する利益剰余金当期首残高・利益剰余金当期末残高が単独で算出可能である。
- ③ 当期純利益の検算が可能である。当期純利益+30,000=40,000-10,000=60,000-30,000

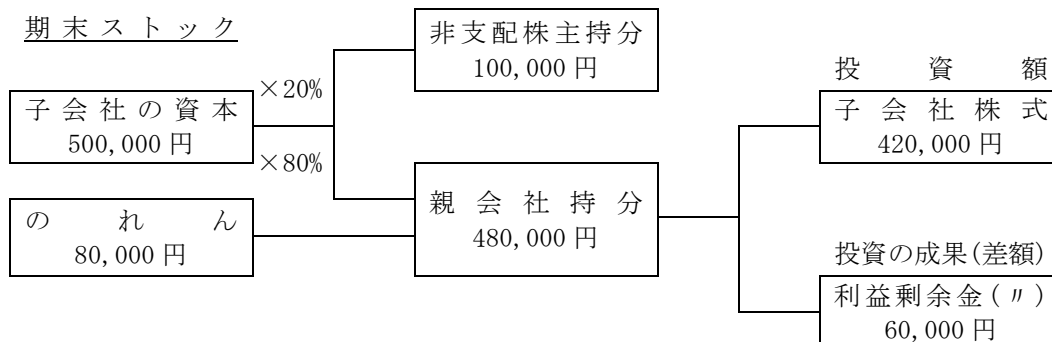
	X1. 12/31	連結第1年度	X2. 12/31	連結第2年度	X3. 12/31
資本金	300,000		300,000		300,000
利益剰余金	<u>100,000</u>		<u>150,000</u>	+ <u>50,000</u>	<u>200,000</u>
合計	<u>400,000</u>		<u>450,000</u>		<u>500,000</u>
非・持分比率			20%	20%	20%
非支配株主持分			90,000	+10,000	100,000
親・持分比率	80%		80%	80%	80%
親会社帰属	320,000		360,000	+40,000	400,000
のれん	差額 100,000	▲10,000	<u>90,000</u>	▲ <u>10,000</u>	<u>80,000</u>
親会社持分	<u>420,000</u>		<u>450,000</u>		<u>480,000</u>
子会社株式	420,000		420,000		420,000
利益剰余金			<u>30,000</u>	+ <u>30,000</u>	<u>60,000</u>

【枝分かれ図（ストック・アプローチ）】（参考：この図は下書きしないで下さい）

◆ X2. 12/31（連結第1年度末）



◆ X3. 12/31（連結第2年度末）



【楽しく学ぼう！連結会計3・損益計算書】

平成 X3 年度 S 社個別損益計算書

S 社 損 益 計 算 書

自平成 X3 年 1 月 1 日

至平成 X3 年 12 月 31 日

(単位:円)

諸費用	150,000	諸収益	200,000
当期純利益	50,000		
	200,000		200,000

【仕訳一巡(連結第2年度期首～連結第3年度期首)】連結会計の目的である事業投資の成果の計算や親会社持分の把握を連結仕訳だけで完結させる為、本来の連結手続きではない、S社当期純利益の個別消去・連結振替を追加しています。この趣旨から各項目の内、個別同士、連結同士は相殺し、個別と連結の相殺は行いません。なお、青枠が親会社持分です。

◆ 連結第2年度開始仕訳 (ストック・アプローチ) (単位:円)

資本金当期首残高	300,000	子会社株式	420,000
利益剰余金当期首残高	150,000	利益剰余金当期首残高	30,000
のれん	90,000	非支配株主持分当期首残高	90,000

◆ 当期純利益の消去・振替 (本来の連結手続きではありません)

当期純利益 個別	50,000	当期純利益 連結	50,000
-------------	--------	-------------	--------

◆ 当期純利益の非支配株主への按分: $50,000 \times 20\% = 10,000$

非支配株主に帰属する当期純利益	10,000	非支配株主持分当期変動額	10,000
-----------------	--------	--------------	--------

◆ のれんの償却

のれん償却額	10,000	のれん	10,000
--------	--------	-----	--------

◆ 連結第3年度開始仕訳 (ストック・アプローチ=フロー・アプローチ)

資本金当期首残高	300,000	子会社株式	420,000
利益剰余金当期首残高	200,000	利益剰余金当期首残高	60,000
のれん	80,000	非支配株主持分当期首残高	100,000

※ 試験で開始仕訳が問われた場合、(借方)と(貸方)の利益剰余金当期首残高を相殺して下さい。

【根本は同じ】

以上、一般的に開始仕訳は子会社の利益剰余金当期首残高から親会社に帰属しない金額を控除する手続がメインですが、連結会計は持分比率に基づいて按分を行うことが根本的な目的です。このように目的は按分で手続が控除というズレが連結会計を難しくしているように思えます。

本資料ではこの難しさを回避する為、根本に帰って一連の連結仕訳とその説明について按分の観点からアプローチしています。

【財務諸表一巡】下の S 社財務諸表を P 社財務諸表と合算すれば連結財務諸表は完成します。
 なお、子会社株式は合算により相殺消去されます。

平成 X2 年度修正後 S 社貸借対照表

S 社貸借対照表				平成 X2 年 12 月 31 日				(単位:円)
諸	資	産	950,000	諸	負	債	500,000	
の	れ	ん	90,000	子	会	社	株	
				利	益	剰	余	
				金			30,000	
				非	支	配	株	
				主	持	分	90,000	
			1,040,000				1,040,000	

平成 X3 年度修正後 S 社損益計算書

S 社損益計算書				自平成 X3 年 1 月 1 日				(単位:円)
				至平成 X3 年 12 月 31 日				
諸	費	用	150,000	諸	収	益	200,000	
の	れ	ん	償					
			却					
			額					
			10,000					
			10,000					
			30,000					
			200,000				200,000	

平成 X3 年度修正後 S 社貸借対照表

S 社貸借対照表				平成 X3 年 12 月 31 日				(単位:円)
諸	資	産	1,000,000	諸	負	債	500,000	
の	れ	ん	80,000	子	会	社	株	
				利	益	剰	余	
				金			60,000	
				非	支	配	株	
				主	持	分	100,000	
			1,080,000				1,080,000	

【総合問題への取組み】

まず、時系列表は資本連結仕訳と全く同じ内容なので、仕訳による記入と集計の煩雑さを避ける為、時系列表での答案作成をお勧めします。なお、時系列表に代えてこのページの当期末 B/S と当期 P/L でも構いません。この場合、利益剰余金当期首残高 30,000 円は、当期末残高 60,000 円から当期純利益 30,000 円を差し引いて逆算すると時間を要しません。

一方、日商検定 1 級以上の成果連結は超速！成果連結【効率的な解法】をご確認下さい。

それでは、今回の内容はここまでです。See You Again！

【今後の目標】

本試験であらゆる出題形式に対応出来る実力を養うには、本質的理解を踏まえたテクニックが必要ですので、時系列表だけでなく他の形式についても練習し、理解を深めて下さい。また、応用論点は専ら持分変動ですので、【枝分かれ図】や【仕訳一巡】を通じて持分への理解を深めて下さい。

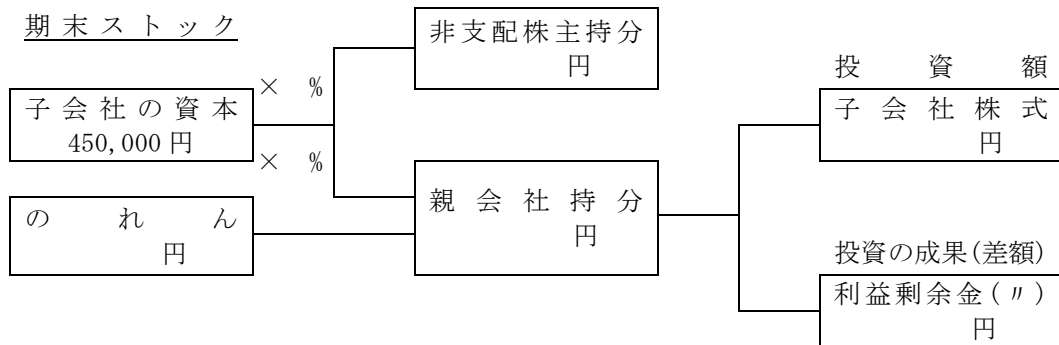
【時系列表（ストック・アプローチ）】（単位：円）

親会社株主に帰属する当期純利益の検算：

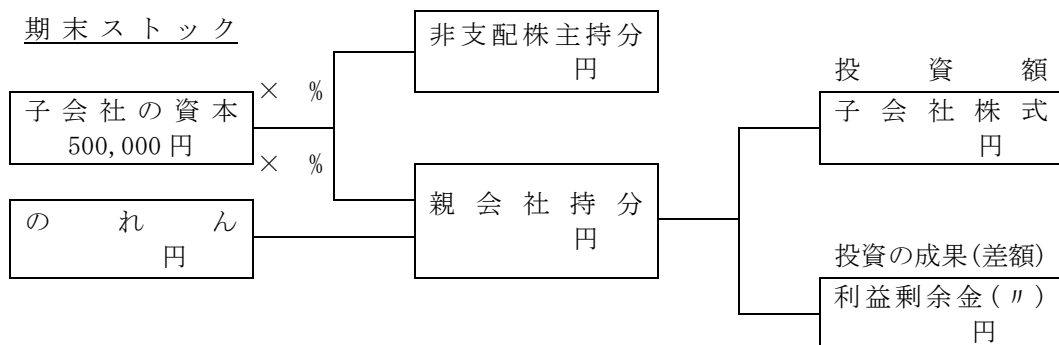
	<u>X1. 12/31</u>	連結第1年度	<u>X2. 12/31</u>	連結第2年度	<u>X3. 12/31</u>
資 本 金	300,000		300,000		300,000
利 益 剰 余 金	<u>100,000</u>		<u>150,000</u>	+ <u>50,000</u>	<u>200,000</u>
合 計	<u>400,000</u>		<u>450,000</u>		<u>500,000</u>
非・持分比率					
非支配株主持分					
親・持分比率					
親会社帰属のれん					
親会社持分子会社株式					
利益剰余金					

【枝分かれ図（ストック・アプローチ）】（この図は理解用です。時系列表だけの処理が目標です）

◆ X2. 12/31（連結第1年度末）



◆ X3. 12/31（連結第2年度末）



【楽しく学ぼう！連結会計3・損益計算書】

平成 X3 年度 S 社個別損益計算書

S 社 損 益 計 算 書

自平成 X3 年 1 月 1 日

至平成 X3 年 12 月 31 日

(単位：円)

諸	費	用	150,000	諸	収	益	200,000
当	期	純	利	益			
			50,000				
			200,000				200,000

【仕訳一巡(連結第2年度期首～連結第3年度期首)】

ストック・アプローチでは個別同士、連結同士は相殺し、個別と連結の相殺は行いません。

- ◆ 連結第2年度開始仕訳 (ストック・アプローチ) (単位：円)

- ◆ 当期純利益の消去・振替 (本来の連結手続きではありません)

- ◆ 当期純利益の非支配株主への按分

- ◆ のれんの償却

-
- ◆ 連結第3年度開始仕訳 (ストック・アプローチ＝フロー・アプローチ)

※ 試験で開始仕訳が問われた場合、(借方)と(貸方)の利益剰余金当期首残高を相殺して下さい。

